

「北海道」の名付け親

松浦武四郎

松浦武四郎は一八一八年、伊勢国一志郡（現在の三重県松阪市）で生まれました。



〔松浦武四郎記念館蔵〕

幼い頃から「自分もいつかは諸国をめぐり、この目でいろいろな土地を見てまわりたい。」というあこがれをもっていた。

いた武四郎は、十六歳の時に、それまで通っていた塾をやめ、家出をしてまで江戸へ向かったのです。江戸に着いてからは、親戚の家で居候をして過ごしますが、親の許しがなく江戸に出てきたことがわかり、連れ戻されることになりました。

ふるさとへ戻った武四郎は、しばらくは家の手伝いをしたり、絵を学んだりしていましたが、十七歳になって、父親に、「旅には生きた学問があります。私はこれから、さまざまな国々の動きを知りたいのです。」と熱い思いをぶ

つけました。その言葉に、父親は武四郎に二度目の旅を許しました。

父親は、「二、三ヶ月もすれば戻ってくるだろう。」と思っていました。が、武四郎が再びふるさとに戻ってきたのは、それから十年後のことであり、両親に会うことは二度とありませんでした。

ふるさとを離れた武四郎は、長崎で出会った老人から聞いた話に激しく心を動かされました。それは、蝦夷地（現在の北海道）がロシアに狙われているということでした。老人の言葉に衝撃を受けた武四郎は、一人で蝦夷地を探検することを決意しました。

まず、南西部の松前に降り立った武四郎は、アイヌの人たちの協力を得ながら、山や川の様子などを細かくメモ帳に記すとともに、アイヌの人たちの生活や習慣を調べていくうちに、アイヌの人たちの苦勞を知ることになりました。武四郎は、アイヌの人たちと暮らしをともにし、その言葉を学んで、アイヌの人たちに案内してもらいながら蝦夷地を調査しました。その探検の中で武四郎は、ごはんを平等に分け、アイヌの人たちと同じものを食べました。そのころの役人や商人は、アイヌの人たちといっしょに食

事をするのがあまりなかったため、アイヌの人たちとはとてもおどろき、親しみをもちました。

武四郎はいくつものコタンおとしずを訪ねましたが、そのなかには、商人たちに川をさかのぼるすべてのサケをとられたコタンもありました。そんなことを知らなかった武四郎は、コタンの人たちに食料を分けてほしいと頼みたのました。すると、コタンの人たちは、お礼も受け取らずに干し魚ほを分けてくれたのでした。あとで商人たちのことを知った武四郎は、アイヌの人たちの優しさに涙なみだを流しました。

武四郎は、蝦夷地の調査結果を地図や書物にまとめました。これらは、当時、蝦夷地の地理やアイヌの人たちのことに関心を寄せる人々にとって、とても貴重なものでした。

その後、時代は明治になり、蝦夷地のことをよく知る武四郎は政府の役人に任命にんめいされ、蝦夷地に代わる新しい名前を考えることになりました。いくつかの候補こうほが出されまし



「武四郎と案内するアイヌの人たち」
〔松浦武四郎記念館蔵〕

たが、この中で取り上げられたのは、武四郎の思いがもつとも強かった「北加伊道ほっかいどう」でした。武四郎は、アイヌの長老から、この大地に生まれた人を「カイ」とよぶことを聞き、そこで、「北にあるアイヌの人たちが暮らす大地」という思いを込めて「北加伊道」という名前を考えました。その後、「加伊」という漢字は「海」に変わり、今の「北海道」になりましたが、そこには、アイヌの人たちを大切にしようとする武四郎の思いが込められているのです。

一八一八	伊勢国一志郡（現在の三重県）で生まれる
一八四五	初めて蝦夷地を探検する（二十六歳）
一八五八	六回目の蝦夷地探検の後、精力的に地図や書物をまとめ始める（四十二歳）
一八六九	明治政府の役人として、北海道の名前を考える（五十三歳）
一八八八	東京で死去する（七十二歳）

*コタン：アイヌ語で集落のこと

*干し魚：干して保存してあった魚